コンピュータによる冊子体図書目録の作成

——杏林大学医学図書館の事例——

Computer Based Book Catalog: The Case of Kyorin University Medical Library

下 村 政 光*

杏林大学医学図書館

I. は じ め に

カード目録か冊子体目録かという議論は、これまでもそう多くはないが行われ、そしてその結果はいつも冊子体目録に分の悪い結果に終わっているようである。その最大の原因は、冊子体目録ではレコードの更新が難しい、というところにあると思われる。つまりそれは、結果的に利用者にすばやく正確な情報を伝達するという機能において劣ることにつながり、冊子体目録の持つ可動性や一覧性といった利点をもってしても太刀打ち出来なかったものである。実際カード目録とは優れた発明であり、図書館のデータベースの作成とそれを基盤とした図書館の諸活動に多大の貢献をして来たと言える。ところがコンピュータの利用が図書館の手のとどくところに来たことによって、事態は冊子体目録に有利に傾いている。必要なつど改訂し、必要な間隔で冊子体目録を発行出来るようになったからである（もっともコンピュータは、冊子体目録の存在をもそう永くはゆるしておかないであろうと思われるが）。たぶん今、対カード目録で残る問題はただひとつ、コストの面で冊子体は対抗出来るかどうかというところにある。だが我々は検討の結果、コストの面でも現実的になったと判断し、カード目録から冊子体目録へ移行することにした。

II. コンピュータ利用について

我々が、コンピュータ利用が現実的なものになったと判断するに到るまでの状況について若干触れておきたい。

たとえば COBOL によるコンピュータの処理過程をみると、SORT, EDIT, MERGE といった処理がファイルを中心に展開されている。これは実に我々がずっと以前からカードファイルをファイルとして営営としてやって来たことではないだろうか。コンピュータというものが、たいへんライブラリ・オリエンテッドなものに思われてならない。ところでコンピュータが図書館向きで図書館のいろいろな業務の処理に適しているとしても、10 年ぐらい前まではまだとび抜けて高価なもののひとつであった。一方では図書館活動が生み出す価値を測定する方法がなく、図書館は非採算部門として、コンピュータ利用から最も遠い位置にあると思われていたのである。最近でも図書館の評価に関してはほとんど変化はみられないが、コンピュータの方は超 LSI や記憶素子の開発が進み、おどろくべき小型化、低廉化を達成している。価格のほかには我々図書館(特に大学図書館)の立場からコンピュータ利用にふみきれないまひとつの大きな理由があった。それは漢字処理の問題である。漢字処理が技術的にもコストの面からも現実的なものとなったのは、わずかこの数年の間の目ざましい発展によるものであり、それ以前はかなりの前途多難の様相を呈していた。ところが図書館がかかわる「書誌情報」は、ローマ字やカタカナでおきかえることが困難なもののひとつ¹⁾であり、そのことは特に大学図書館が担う学術情報において顕著である。したがって大学図書館におけるコ

* Masamitsu SHIMOMURA: Kyorin University Medical Library, 20-2, Shinkawa 6-chome, Mitaka City, Tokyo 181, Japan.
(昭和 58 年 5 月 18 日 受理)

ンピュータ利用は、漢字処理が現実的なものとなるまで待つのが得策であると考えられた。

コンピュータ利用が現実的なものとなったとして、いったいどこから始めたらよいか。たくさんの線で、そしていかにも容易そうに結ばれた図面で示されるトータルシステムというものは魅惑的だが、まったく新しく1から建設される図書館で、当初から計画に組み入れられるという幸運でもなければ不可能に近い。多くの場合段階的に実施していく他はない。資料の重要性や購入予算に占める割合などから考えて、医学図書館においてはまず雑誌管理から始めるのが最も効果的であると考えられる。だが雑誌管理のコンピュータ化は複雑な要素が多い上、リアルタイム処理でなければ効果が期待出来ない。自前のコンピュータを持たなければ無理である。大学図書館にとって貸出管理の機械化はそれほどメリットがない。第一図書マスターファイルがなければ不充分である。医学図書館においては、図書は雑誌に比べてその量は少ないが、処理(受入から閲覧目録にファイルされるまで)には比較的多くの時間がかかっているものである。それもヘディングやファイリングなどの単純作業に案外時間をとられている。この目録関連業務はバッチ処理でも効果が期待出来る上、目録関係の標準化は図書館の業務の中では進んでいる方であり、機械処理しやすい面を持っていると考えられる。

Ⅲ. 冊子体目録へ

目録に関してコンピュータを利用するならオンライン目録がゴールである。このオンライン目録という用語は、また目録へのコンピュータ利用の動向が整理されないままに使われ始め、オンライン目録業務とオンライン閲覧目録の両方の意味を含んだまま、時には前者の、時には後者のまた時には両方の意味で使われて来たように思われる。ここでは両方の意味を含めてオンライン目録という用語を使うことにしたい。

さて目録にコンピュータを利用する場合、最終的にはオンラインだが、自前のコンピュータを持たない現在バッチ処理で外注方式というのは当然の帰結であった。またかりにコンピュータを所有していたとしても、和書は漢字処理が不可欠であり、なかでも漢字インプットは専門職にまかせた方がはるかに効率がよいという考えを持っていたので、インプットは外注にまわ

したに違いない。ところでさしあたり外注処理でも目録関連業務の改善につながると考えたのは、①出力に際してアクセスポイントが自由に指定出来るので、標目のように項目の優先順位を考慮する必要がなく、比較的機械的に目録作業が出来る、②時間のかかるヘディングやファイリングをゼロに出来る、③冊子体目録の作成が容易になるが、冊子体目録の持つ一覧性、可動性が利用者の目録利用度を高める、などの理由による。なおこれまでコンピュータ利用による冊子体目録は年間増加図書目録のようなものにかざられ、カレントな所蔵情報はいぜんとしてカード目録によっている場合がほとんどである。しかし我々はカレントな所蔵情報も冊子体目録で提供しようと考えた。

Ⅳ. 冊子体目録作成システム

昭和54年10月に、コンピュータ処理部分の外注による冊子体閲覧目録の作成に関する提案書を大学当局に提出した。これは必然的に目録業務の改変を伴う内容のものであった。幸いこれが承認され、以後主任司書を含む5名のメンバーによる会合を月1回ぐらいのペースで開催し基本設計をした。設計の前提は、① finding list, ②記入の簡略化, ③ UNIMARC の尊重, ④電算処理の外注, ⑤カード目録の中止, であった。途中で外注業者としてK書店を決定し、基本設計に対して電算処理部分とのすりあわせを行った。実施は昭和56年4月からとなっている。図1に目録作成フローを示す。

1. 入力

入力シート(図2)記入方式とした。また和洋同一シートを使うことにした。入力項目はだまかに2つに区分され以下のようになっている。()内はケタ数。なお書誌項目はすべて可変としている。

(1)管理項目

ID 番号(5), 登録番号(6), 請求記号(20), ISBN(13), 分類副出(7), LC No.(7), 図書コード(), 言語区分(1), 副本リンク(6), 受入年月日(8), 受入種別(1), 財源(1), 受入先(2), 価格(7), 所蔵(3), 学部(1)

(2)書誌項目

書名, 副書名, 巻次, 個人著者, 団体著者, 版次, 出版地, 出版社, 出版年, 叢書名, 叢書巻次, 多巻物の各巻書名, 多巻物の各巻著者, 注記, 原書名,

図1 冊子体目録作成フロー

書名ルビ、副書名ルビ、個人著者ルビ、団体著者ルビ、叢書名ルビ、各巻書名ルビ、各巻著者ルビ

入力シートの管理項目は、請求記号を除いて受入係において記入される。その後シートは図書とともに目録係へまわされ、請求記号、書誌項目が記入される。記入に際して担当者ごとにバラツキが生じないように、記入マニュアルが用意されている。シートは2枚セットの複写式になっており上1枚が図書館用で下の方が業者送付用である。図書館用には書名の境のところにミシン目が入っており、切りはなしてカウンターにファイルしておき、冊子体目録が出来あがるまで利用する。シートは1週間単位でまとめられ、宅急便で業者に送られる(図3)。校正は再校までとし、それ以後の修正は4半期累積や、年間累積の時点で行なう。ファイルフォーマットは、将来大規模目録データベー

単行書入力シート (K)

ID. No	001	M3127
洋・和	000	0
請求記号	003	WS100-SH57-009A
登録No	002	048032
ISBN	010	4-521-2681-3
分類	004	WS280
L.C. No	015	
図書コード	020	
言語区分	021	J
受入年月日	050	19820506
受入種別	051	1
受入先	053	WA
所蔵	090	
価格	064	24,660
学 部	095	2

書 名	200	新小児医学大系
ルビ	950	SHANSHONAKAGAKUTAKEN-009A
副 書 名	201	
ルビ	951	
巻 次	202	9巻A
個人著者	210	
ルビ	952	
団体著者	211	小林△登(編)
ルビ	953	KOYASHI, NORIO
版 次	220	
出版地	221	東京
出版社	222	中山書店
出版年	223	1982
叢 書 名	230	
ルビ	954	
叢書巻次	231	
多巻物の各巻書名	240	小児呼吸器病学 I
ルビ	955	SHONAKOKYUKAIBYOGAKU I
多巻物の各巻著者	250	雄本△忠市(編); 村上△勝美
ルビ	956	KJIMOTO, TABAUCHI; MURAKAMI, KATSUYOSHI
注 記	300	
原 書 名	500	

図2. 入力シート

図3 ファイル作成の流れと期間

スがオンラインで利用可能になると考え、UNIMARCに準拠している。TAG ナンバーも UNIMARC のそれ(表1)を考慮したものである。

2. 出力

出力としては次のものがあるが、現在実行中のものは①だけである。

- ①冊子体目録
- ②図書原簿
- ③財産目録
- ④諸統計

冊子体の目録の本文は分類別目録で、分類大綱目のもとでは請求記号順となっている(図4)。計画では和洋混排であったが、入力コストを下げるため洋書の漢字インプットを見あわせているので、出力は和洋別である。なお洋書の出力例は省略した。本文に対して著者名索引(図5)、書名索引(図6)がつく。著者名索引

表1 UNIMARCのデータエレメント

(小田論文²⁾により作表)

TAG	機能
0××	識別
1××	コード化情報
2××	記述
3××	注記
4××	レコードリンク
5××	関連書名
6××	主題分析
7××	知的責任
8××	国際的使用
9××	各機関の部内使用

には会議名を含み、書名索引には叢書名を含んでいる。索引から本文への案内は、本文につけられた一連番号

レセプター基礎と臨床— 吉田 博(編著) 東京 中外医学社 1981 (046142)	M810278
(WK102-R22)	
消化管ホルモンの進歩 消化管ホルモン研究会(編) 4 VIP 阿部 寛(編) 東京 中外医学社 1981 (045934) (WK170-SH96-004)	M810279
グルカゴン—基礎と臨床— 阿部 正和(編) 東京 医歯薬出版 1980 (045371)	M810280
(WK801-G53)	
糖尿病治療のための食品交換表—医師・栄養士・患者にすぐ役立つ— 日本糖尿病学会(編) 東京 文光堂 1980 (045373) (WK819-N71)	M810281
WL 神経系	M810282
CT SCAN診断のための脳解剖図譜 松井 孝嘉(著) 東京 医学書院 1980 (046029) (WL017-C85)	セイシンカ

図4. 冊子体目録本文

M810265	M810603 M810604
“肺と心” 編集同人	市岡 操
M810218	M810134
HANSTEN, PHILIP D.	冢永 三郎
M810057	M810484 M810485
原田 尚	医学研究奨励財団
M810249	M810096
Hari Maria	医学教育研究会
M810175	M810269
長谷川 敏雄	医学研究奨励財団
M810132 M810130 M810131	M810128
M810133 M810134 M810135	池本 秀雄
橋本 萬太郎	M810188 M810189

図5. 著者名索引

M810174	M810592
内科学 臨床実地編 7/1	日本医師会医学講座
M810159	M810102
内科学 臨床実地編 8/2	日本儒学研究
M810160	M810412
内科Q & Aアレルギー性疾患膠原病	日本古寺美術全集 17
M810194	M810588
内科セミナー END8	日本古寺美術全集 25
M810080	M810589
内科セミナー CV14	日本古寺美術全集 20
M810242	M810590
内科セミナー PN1	日本の参考図書一解説総覧一
M810285	M810432

図6. 書名索引

による。本システムでは表2にみる通り月刊が基本で、当該年度・受入図書に対して計13回の出力を行なうことにしている。3ヵ月目ごとの月では月刊を省略し4半期累積を出力する。各出力表は1部のみプリントアウトされ、必要部数はコピーによってまかなう。現在は5部づつ作成している。なお希望者(教室)にはコピー実費で提供している。出力表の他のものとしては現在図書原簿の出力をテスト中である。

表2 年間刊行順序と種別

1	2	③	4	5	⑥	7	8	⑨	10	11	⑫	⑬
月刊	月刊	4半期累積	月刊	月刊	4半期累積	月刊	月刊	4半期累積	月刊	月刊	4半期累積	年間累積

V. 検 討

もっとあいまいな点をつぶしてから、もっと電算処理のコストが下がってから、と考えていたらおそらく実行出来なかったに違いない。それにしても、いささか蛮勇をふるった感じで実行にうつしてから2年が経過した。その間計算通りだ、我が意を得たりと思うこともあったが、こんなはずではなかったと思うことの方が数倍も多かったことは否定できない。以下にそれらを取りまぜて検討してみたい。

1. 記入の簡略について

作成する目録は館内目録である。単行書の蔵書量が将来とも30万冊を超えることがないと思われる当館

のような小図書館にとって、目録に求める機能はbibliographic toolではなくてfinding listのそれである。書誌学的精緻を追求する必要はない。ある単行書が当館に所蔵されているかどうかわかればよい。極端な言い方をすれば、目録収載のものが求めるものとまったく同じかどうかわからなくてもよい。同じものらしければ現物にあたって確認すればよいのである。そういう意図のもとに記入項目の簡素化、記入の簡略化を心がけたつもりが思ったより簡略化されていないようである。一例をあげると、項目では副書名、注記なども省略してよいのではないかと考えられる。記入上でもたとえばTAG 210 著者名のところでは各役割表示ごとに1人記入することになっているが、監修者、編者、著者が表示されていれば3名記入することになる。これなど役割表示にかかわらず1人で充分と考えられる。しかし、目録規則通りのフルエントリーを持つ精緻な目録を否定するものではない。むしろ必要不可欠だと考えている。ただそのような精緻な目録作業を重複して行なうことは愚かしいことではないだろうか。そのような目録作成の任は、それにふさわしい立場、歴史、経験、能力を有する大図書館に担ってもらわなければならない。

2. ルビについて

漢字を含む日本語の場合、排列のためにルビをふることが必要になる。これはファイルの容量の節約の上からも、記入の手間の上からも、コンピュータ利用にあたって日本語の不利な点のひとつである。当館ではルビにヘボン式ローマ字を採用した。それは、①これまでカード目録においてローマ字でヘディングを与えて来たという利用者、館員双方の馴れを考慮し

たこと、②書架上はすでに和洋混排であり、冊子体目録も和洋混排にしようと考えたこと、などによる。ところがローマ字はカタカナより2倍近く字数が多くなるので、書名ルビの場合入力シートのきめられたワク内に納まりきれない例が思ったより多く発生した。この場合同じIDナンバーでもう1枚シートをおこすことが可能だがムダだと思われたのでシートの余白を利用してしのいだ。結果としては特に問題はなかった。

外来語のルビは、これまでのカード目録では原綴を採用して来た。しかし冊子体目録ではそのままローマナイズすることにした。それは、①利用者が簡単に原綴にもどせない外来語も多く存在すること、②原綴はいわば英訳なのであって読みではないと考えられること(たとえば、ハンドブックの読みはhand bookではない)、③原綴にもどすことが不可能なものの存在すること(たとえばリウマチ)などによる。

3. LC MARC の利用

当館で受入れている洋書の9割近くにISBNが付されている。またISBNでLC MARCを照合すると約60%のヒット率であり、ISBNを介してLC MARCを利用することは省力化につながると考えられる。問題はLC MARCに収録されているかどうかかわかるまで、入力シートの書誌項目記入が出来ない(収録されているなら書誌項目の記入は省略出来るので)ということである。それはまた、もし収録されていない時の記入のために、現物を排架にまわすことが出来ないということの意味する。書誌項目未記入の入力シートを業者に送付し、アンマッチ分の入力シートが戻って来るまで1週間以上かかった。そこでISBNをテレックスで送信し、結果もテレックスで返してもらうことを考えたが、業者の機械時間の問題があり、ほとんど短縮出来ないことがわかった。したがって現在までTAG変換のテストは行って来たものの利用にまで至っていない。和書と同様すべて目録係が記入する方法で入力して来た。しかし幸いなことに1983年4月よりDIALOGにLC MARCがとり入れられた。今後はDIALOGを利用し入力シート記入の前にISBNによってオンラインでLC MARC収録の有無を迅速に確かめることが出来よう。これでLC MARC利用のめどがついたと考えている。

4. 外 字

JIS規格の文字セットで提供されない文字を「外字」という呼び方をしているようである。したがって、

各メーカーの機種ごとに外字のコードはまちまちだと考えられる。これまでの経験では、この外字の発生率は思っていたよりも少ないと感じた。やはり論文タイトルではなく単行書の書名では、そう特殊な文字は使われないということなのであろう。きちんと計算したわけではないが、おそらく0.0何パーセントというくらいの発生率ではないかと思われる。それでもとにかく外字は発生する。現在外注処理している機種と、将来我々が自前で処理しようとしている機種とは異なっている。めんどくさいことではあるが、その時点で外字コードのコンバージョンを行なう必要が出て来るであろう。外注するにしても、自分のところの将来のコンピュータ導入計画を詳細に検討してから外注先をきめた方がよいという、小さいがよい例のひとつと言える。

5. タイムラグ

一見とるに足らない事のように思われるが、外注方式においては、入力シートや校正ゲラのような帳票類の受渡しが重要である。この受渡しは、自前で処理する場合には時間的にほとんどゼロであるだけに、外注方式の全工程の所要時間を意外に左右する。これは冊子体目録のタイムラグ(受入から目録発行まで)に大きく影響する。本システムでは、入力シートのまとめ、校正、校正入出力などを1週間単位で処理することになっている。帳票類の受渡ししも1週間単位で発生する(図3)。受渡しは初め当館の近くにある業者の営業所員が定期的に週1回訪問して来ているので、その営業所員が受渡しの窓口になっていた。しかしこれでは中継点でのロスタイムが大きく1週間単位の処理を不可能にしたので、後に宅急便による受渡し方式に変更した。現在のところ、当館からの帳票類送付は1週間単位が守られているが、業者からの返送が定常的でなく、冊子体の刊行スケジュールがまだ当初の予定通りとなっていない。仮りに予定通りにいったとしても、図3にみられるように、ある週にまとめられた入力シートが再校を経て磁気ファイル化されるまでに6週間を要する。したがってある月の第4週目にまとめられた入力シートがファイル化されて始めて月刊版の版下がつくれるから、月刊版のタイムラグは1ヵ月半から2ヵ月となる。また個々の図書の受入から目録発行までのタイムラグの最大は2ヵ月半から3ヵ月となる。カード目録の場合は最大でも1ヵ月くらいの遅れで閲覧目録へのファイリングが完了していたので、そ

れに比べれば速報性の面では後退したと言える。しかしこれまで閲覧目録の利用がそう多くなかったこと（これに安住してはいけないうが）、新着図書を展示していること、開架制をとっていることなどから、利用者に迷惑のかかるようなことはないと考えている。なお、外注方式での月刊版タイムラグを2ヵ月以内に短縮することは、かなり難しいと感じている。

6. バックファイル利用

電算処理上はどのようにも累積冊子体化が出来る。本システムでは4半期、年間の累積を行なっている。年間以上の累積のかたちとしては、年間累積を一定期間続けて、数年間の累積版を作成するというのが一般的であろう。カード目録の場合は、原則として全累積のかたちとなっているのが普通で、論理的なひとつのファイル群を検索すればよかった。しかし冊子体では刊行のつど全累積のかたちをとるのは費用面でムダが多すぎると考えるのが常識的である。年間累積を経て5年間累積をくりかえすなどが考えられるが、同レベルのファイル(累積版)を複数検索しなければならないという不便はまぬがれない。この問題は、オンライン閲覧目録になれば氷解することはもちろんである。

7. 費用について

コンピュータ利用のシステム紹介などで、費用について触れたものは少ない。いろいろ差し障りがあったり、また各館の持っている条件によって左右される面があり、一般化されにくく、結局は参考にならないということなのかも知れない。当システムにおいても、業者がすでに開発し終ったシステムを導入したわけではなく、いわば共同開発といった色あいもあるので、開発費がコストに反映されていないという事情がある。したがって具体的な数字をあげることはさし控えるが、スタート時点での大まかな見積を参考までに示すことにする。表3はコンピュータ利用の場合の月あたりの経費算定の基礎となる数字をあげたもので、本

表3 目録経費算出基礎

件 名	月間量	件 名	月間量
入力シート用紙	450枚	校 正（2回）	17.5 h
シート記入(6/h)	75 h	目録版下（月間）	34 p
入 力（和）	270件	“（4半期）	38 p
入 力（洋）	180件	“（年間）	50 p

学2学部で月間450冊受入れるとして試算したものである（ちなみに実施2ヵ年間の受入冊数は表4の通りである）。これをもとにした月間経費の見積額は、¥189,800となる。カード目録作成の場合の算定基礎数字は省略するが、月間経費は¥167,300となる。このままではコンピュータ利用の方が2万円強割高となるが、電算処理の方が月間処理量が増加すること、また人件費増のはねかえり分がカードベースの場合より少ないであろうことを考えるならば、引きあう数字ではなかろうか。

表4 年間受入冊数
（医学部・保健学部合計）

	1981	1982
和 書	4,077	3,358
洋 書	1,281	1,020
計	5,358	4,378

VI. 今後の展開

現時点でも和書、洋書とも大規模データベースが存在している。このようなデータベースは可能なかぎり利用していく方向で行きたい。権威ある専門機関ですでにデータベース化されているものを、各館ごとにまた目録記入する愚はなるべく避けたい。前に述べた通り、LC MARCの当館の冊子体目録への利用はめどがついた。問題は和書である。JAPAN MARC, NIPPAN MARC, TRC MARCなどが存在するが、①タイムラグが大きい、②図書コードが普及していない、③LC MARCの場合のような中間処理業者が存在していない、などから現時点では当館のような冊子体目録に利用することはむずかしい。これらの問題が早く解消することを望むのみである。

学術情報システムの図書サブシステム³⁾における和書のデータベースは、JAPAN MARCと参加館から入力されたオリジナル目録によって構成されると言われる。ファイルにない場合は参加館がオリジナル目録を入力するので、同システムではJAPAN MARCのタイムラグがカバーされると思われる。このシステムからは、カード、冊子体、COM及びオンラインいずれのかたちでも提供されるとしている。このシステムが稼動を始め、我々のような中小大学図書館でもオンライ

ン利用が出来るようになれば、我々が現在目録に関して抱えている問題のほとんどは解決するに違いない。なお、オリジナル目録入力項目は、全国的規模の総合目録の中で特定の図書を同定出来るために必要な最小限の記述項目を選び、国際的標準及び全国の大学図書館の平均値を加味して決める必要がある³⁾、としている。これは中小の大学図書館で計画にあるいは進行中の電算機利用の目録システムに与える影響が大であるだけに、早急に基準を示すことが望まれる。日本医学図書館協会(JMLA)の医学洋書総合目録のファイルを各館の目録作業の省力のために利用出来るのではないかという考えがある。内容的には医学書のみであっても利用の可能性はある。ただし、入力のタイムラグを縮めること、オンライン利用が出来るようにすることの前提条件を満たす必要がある。各館が医学書だけの年間増加図書目録を作成するために利用するのであれば、すぐにでも利用可能であろう。なお、JMLAのこの総合目録ファイルは、このまま蓄積を重ねて行けば、学術情報システムのデータベースの構築に貢献出来る余地が大いにあると思われる。

当館のような冊子体目録作成システムを数館が共同でやるという展開は考えられるだろうか。残念ながら、共同ファイルの利用はオンラインでなければ意味をなさないと思われる。ただし同一の入力フォーマットを用いることにより、入力コストを低減させることは可能と思われる。

先にも述べたが、我々の冊子体目録はオンライン目録までのつなぎであると考えている。それまでにファイルの蓄積を重ねていくことがもうひとつの意図なのである。目録外注処理進行中の昭和56年末に、本学にも大型コンピュータが導入され、中央情報処理室が誕生している。これからは前出の状況を充分考慮しながら、学内コンピュータを利用したオンライン目録をはるかな目標とすることになる。ただ我々にはソフトを開発する余力がないので、なるべく既製の使えるソフトは使っていきたいと考えている。ソフトに金を払わないという風潮も大分改善されて来ているし、ソフトそのものも安価になりつつあるのはその意味で心強

い。

VII. お わ り に

コンピュータの利用が現実的なものになって来ている一方、不況の中で人員増や補充が望めないという状況がある。そんな中で、コンピュータ処理外注でも効果のあがる業務として目録業務を選び、カード目録にかえて冊子体目録を作成している事例について報告し、若干の検討を加えた。まだ結論を出すのは早いですが、コンピュータを所有していない図書館にとって本システムのようなものは、サービス、コスト、省力化といった面でだいたい満足出来るものと思われる。利用出来るデータベースが改善されれば、いっそうの効果が期待できる。また来るべきオンライン目録時代へ向けて、ファイルの蓄積をしておくという意義が大きい。

(本稿の要旨は、第2回生物医学図書館員研究会において発表した。)

引 用 文 献

- 1) 上田修一：日本語書誌データの作成・編集・出力—筑波大学の事例—。大学図書館研究, 17: 53—59, 1980.
- 2) 小田泰正：文献情報データベースの最近の動向。情報処理, 21(12): 1259—1265, 1980.
- 3) 学術情報センターシステム開発調査概要。昭和57年度、文部省学術国際局情報図書館課, 1983.

参 考 文 献

- 1) Holley, R.P.: 目録担当者と目録業務の将来。現代の図書館, 20(1): 49—54, 1982.
- 2) Williamson, N.J.: Is there a catalog in your future? Access to information in the year 2006. Libr. Res. Tech. Serv., 26(2): 122—135, 1982.
- 3) Wilson, P.: The Catalog as a access mechanism: background and concepts. Libr. Res. Tech. Serv., 27(1): 49—54, 1982.